

海外研修報告書

建畠哲

本研修は主に二つの目的を持つものであった。一つは第二次大戦後の日本美術の展開を欧米の動向と比較検討し、相互的な影響関係や国際的な同時代性の問題を具体的に考察するという、広い意味での比較美術史的な視点による調査研究である。もう一つは戦後美術の流れを他の芸術上のジャンルや社会的背景との関わりの中で再考察することであり、これは美術史へのいわゆるカルチュラル・スタディーズ的な方法の導入の問題とも関係している。

以下、日程に即しつつ、具体的な研修内容を報告する。

2002年7月11日 ドイツ・フランクフルト

ヨーロッパの各都市で持ち回りで開催される現代美術展、マニフェスタと、フランクフルト現代美術館を見学する。

7月12日 14日 ドイツ・カッセル

ドクメンタ展を視察する。5年に1度開催されるベネチア・ビエンナーレと並ぶ最大規模の国際展で、今回はナイジェリア出身のアメリカ在住のキュレーター、オクイ・エンベゾーがディレクターに指名された。ポストコロニアリズム的な視点から組織されており、カルチュラル・スタディーズの方法とも重なり合う点があるのが興味深い。しかし展示自体はオーソドックスなもので、手堅くはあるがやや活気に欠けているようにも思われた。

7月15日 17日 ドイツ・シュツットガルト

優れた環境と施設で知られるアーティスト・イン・レジデンスの「孤独の城」に滞在した。横浜トリエンナーレにも出品したドイツ在住の塩田千春が長期滞在中で、展示室では彼女の個展が開催されていた。美術家のみならず音楽家や詩人にも解放されており、ジョン・ケージの曲を取り上げたコンサートを聞く機会もあった。古城を改装したレジデンスで、建物自体が独特の雰囲気を持っている。ディレクターはフランス人のジャン・バプティスト・ジョリで、彼の創意によるアーティストたちの相互的な交流の場の設定や制作のサポートシステムの充実ぶりは高く評価される。

7月18日 21日 ドイツ・ベルリン

美術館や画廊を視察すると共に、研究者との面談を持った。

ハンバーガー・バンホフ美術館は駅舎を改装したユニークなギャラリーを備えており、コレクションの内容からも現代美術館としてもっとも注目される施設である。ユダヤ博物館はリベスキントの大胆な設計で話題になった、建築そのものが巨大なモニュメントともいべき施設。その他、博物館島にある諸美術館やナショナルギャラリー、アーティスト・イン・レジデンスのベターニエンハウスなどを見て回った。キュレーターや近現代美

術の画廊のスタッフらとも情報を交換する。美術批評家の河合純枝はベタニエンハウスの元館長夫人で、ベルリンの壁崩壊以降の美術事情に詳しく、政治、経済状況がアーティストたちの活動に及ぼす影響について、現実的な分析を聞くことができた。

7月22日 24日 ドイツ・デュッセルドルフ、ケルン

ケルンではルードヴィヒ美術館のマシュー・バーニー展などを見学。日本のアーティストも扱っている画廊経営者のガブリエル・リベットらから、ドイツ、フランスにおける日本美術の受容の状況や評価を聞く。ケルン在住でベルリンのクンストアカデミーの教授でもある画家、池水玲子のアトリエを訪問する。デュッセルドルフではノルトライン・ウエストファーレン美術館などを視察する。クンストアカデミーでは学生のスタジオ・オープンがあり、若い世代の動向を知ることができた。

7月25日 8月4日 フランス・パリ

ポンピドー・センターをはじめとする諸美術館を見学し、キュレーターや美術評論家、研究者たちと意見を交換した。オープンしたばかりの国立の現代美術館、パレ・ド・トキヨーは、廃屋のようなインテリアの施設で、夜中の12時まで開館しているというユニークな方針を取っている。日本の現代美術の紹介にも積極的な同館のキュレーター（その一人は日本出身の三木明子）や建築デザイナーたちと、パリの動向との相互的な比較や影響関係などの問題を話し合った。もっぱら日本のアニメや漫画などのサブカルチャーの受容が話題となる。ちょうどカルチエ財団の美術館で「カワイイ」を標語にした村上隆の展覧会が開催されていたが、日本絵画の平面性からアニメ文化までを展望する彼のスーパーフラットの概念が欧米の美術界にストレートに歓迎されている理由など、興味深い。

また中国出身の美術評論家、フェイ・ダウエーとも、アジア現代美術のヨーロッパでの評価や、ディアスポラとしてのアジアのアーティストたちの活動について情報を交換した。

8月5日 6日 フランス・ニース

パリからダブリンに直接行く予定を急遽変更して、ニース行く。マチス美術館と近郊のバンスのマチスの壁画で知られるロサリオ礼拝堂を見学するため。

8月7日 8日 アイルランド・ダブリン

ジョイスの小説「ユリシーズ」の舞台を見ることが主目的である。マーテルロー塔、サンディマウント海岸、海の星教会、オルモンド・ホテル、パブのディビー・バーニーなどを見て回った。ジョイス・センターにも寄り、所員にアイルランドにおけるジョイス研究の現状を聞く。またジョイスやベケットが学んだトリニティー・カレッジに行き、付属美術館や図書館を見学。

8月9日 14日 イギリス・ロンドン

主に美術館を見て回る。テート・モダンのマチス・アンド・ピカソ展、ナショナル・ギャラリー、ヘイワード・ギャラリー、ホワイト・チャペル・ギャラリー、サーペンタイ

ン・ギャラリー、ICAなど。また画廊街も回る。

8月15日 この日からアメリカ・ニューヨークに移る。

ACC（エイジアン・カルチュラル・カウンシル）の研究者用のレジデンスを借り、コロンビア大学でヴィジティング・スカラーとしての手続きをすませ、以後の調査・研究体制を整える。大学では東アジア研究所に所属し、またドナルド・キーン・センターにも協力を依頼することになった。研究所のスタッフとの打ち合わせ、総合図書館と美術史図書館の利用の仕方、またニューヨーク大学やバーナード・カレッジなどの教授たち、博士課程の学生、ニューヨーク近代美術館、ホイットニー美術館、メトロポリタン美術館のキュレーター、ACCやアジア・ソサエティーの所員などへの研究協力や資料提供を依頼して回ることに3週間ほどを要した。また平行してチェルシーの諸画廊やアーティストたちにも数多く会い、ニューヨークのアート・シーンの最新状況取材した。

アメリカにおける芸術研究では、西海岸の大学を中心にカルチュラル・スタディーズの方法が大幅に導入されていると聞いていたが、コロンビア大学やNYUもその例外ではない。クレオール文学の研究が盛んな英文科、フランス文学科などがその典型だが、美術史においても、フランス近代美術のコンテクストを軸にしたオーソドックスな方法が批判にさらされつつある。しかし負の側面としては、美術作品のクオリティーの問題は棚上げにされ、文化現象のサンプルとしてのみ美術が取り上げられているという面がなくもない。しかし従来はアカデミーでの研究の対象たりえなかったアジアのモダニズムが、より多くの関心を集め始めているのは興味深い変化である。それももっぱらカルチュラル・スタディーズ的な検討の対象であり、比較美術史的な問題意識は希薄であるように思われる。

8月24日 25日 フィラデルフィア、ワシントン

フィラデルフィア美術館、ワシントンのナショナル・ギャラリー、ハーシュホーン美術館などを見学。

10月10日 14日 スペイン・マドリッド

ニューヨーク在住のラテン系作家、ハビエ・テレズ（横浜トリエンナーレの出品作家でもある）と夫人のクィーンズ美術館のキュレーターに同行して、プラド美術館、ライナー・ソフィア美術館、ティッセン・ボルネミスタ美術館、トレドのサンタクルーズ美術館などを見学。

12月23日 26日 マイアミ

クリスマス休暇を利用してマイアミに行く。滞在先はビデオ・アートの巨匠、ナム・ジュン・パイクのお宅で、彼のアトリエに泊めてもらった。夫人でやはりビデオ・アーティストのシゲコ・クボタも含めて、東洋的なものとアヴァンギャルドの関係を話し合うことのできた貴重な機会であった。またマイアミの幾つかの美術館を見学。タイミング良く、草間彌生、ヨーコ・オノの回顧展が開催中であった。

12月27日 30日 シカゴ

シカゴ美術館、シカゴ現代美術館などを見学。シカゴ在住のアーティストたちとも交流を持った。

*これまでの期間、ニューヨークではコロンビア大学、UYU、プリンストン大学などでのシンポジウムなどで、近現代美術の研究者たちと継続的に接触の機会を持ち、意見を交換し、また関係文献の収集に当たった。美術館のキュレーターたちとも日常的に交流をもつ。

マルチカルチュラリズム（ないしカルチュラル・プリュラリズム）とグローバリズムという一見、対立項をなすかに思える思想が、なぜポストモダン的な状況の中で共存しているかといった議論を、コロンビア大学の文学の分野の若手研究者たちと交わす機会が多かった。折しもアメリカがイラクとの戦争へと傾斜していく時期であり、宗教的、民族的原理主義とマルチカルチュラリズムの関係も、しばしば話題になる。グローバリズムとはい現実にはアメリカの一極支配のことではないかというリベラリストからの批判も見られるなど、芸術に関する討議が常に政治に結び付いてしまうのも、9・11以降のアメリカの置かれた状況ゆえであろう。

研究上、きわめて有益だったのは、ロンドンのオープン・ユニバーシティの学生の博士論文の審査員を委嘱され、日本の美術館、博物館の創設の歴史から今日までの日本的な特殊性をテーマにした論文の審査に携わったことである。カルチュラル・スタディーズを代表する学者の一人であるトニー・ベネット教授の学生で、美術史の方法とは全く異なった典型的な“カルスタ”系の論文であったが、内容的にはなかなか優れていた。私がニューヨークを離れることができなかつたために電話会議のシステムによる参加になったが、学生や他の審査員、ベネット教授と“カルスタ”の方法による文化的アイデンティティ研究の意義について集中的に討議することが出来たのは、私自身の研究テーマに即しても、他に得がたい経験であった。

こうしたことも含めて、カルチュラル・スタディーズの有効性について認識を深めていったのだが、しかし美術史、美術批評の方法との比較検討を重ねるうちに、一種の没価値的なその分析の仕方の限界も明確になってきたといわざるをえない。両者は二者択一的なものでもなければ統合可能なものでもなく、いわば相互に補完的な関係におかれるべきだというのが、穏当な結論ではなからうか。

ソーホーにあるイセ・ファウンデーションのギャラリーで、ニューヨーク在住の画家、ウシオ・シノハライベントでの対談を頼まれ、ネオ・ダダ時代のボクシング・ペインティングやイミテーション・アートの制作という半ば伝説化されていたパフォーマンスの再現の現場に立ち会った。美術関係者が数多く集まり、戦後日本の前衛美術の重要な運動を紹介する良い機会となったように思う。

2003年2月1日 バークレー

2月から一ヶ月間、カルフォルニア大学バークレー校のアジア研究所のヴィジティング・スカラーとしてサンフランシスコ近郊のバークレーに滞在する。日本美術史のグレゴリー・レビン教授、アメリカ現代美術史のワグナー教授などと交流する。

特別講義を依頼され、戦後日本の前衛美術とニューヨーク・スクールの相互的な比較を

テーマに取り上げる。ミニマリズムともの派の関係を巡るワーグナー教授との質疑応答など、私とっても意味のある経験であった。

この間、サンフランシスコ近代美術館、バークレー校付属美術館、イエバ・ブエナ・アート・センター、ハートランド・アート・センター、レジオン・ドヌール美術館などを見学する。イエバ・ブエナ・アート・センターのキュレーター、ルネ・グリユスマンに頼まれ、彼の企画した現代術展のシンポジウムで司会役をつとめた。また彼が教える美術大学で日本の現代美術の先端的な状況についてレクチャーをした。

2月4日 5日 ロサンジェルス

ロサンジェルス・カウンティ美術館、現代美術館、ゲッティ・センター、ハーマー・コレクション、ノートン・サイモン美術館などを見学。UCLAの美術科の講師の木村綾らと会食し、西海岸の美術状況について情報を得る。

2月28日 ニューヨーク

ニューヨークに戻り、調査や資料収集の仕上げにかかる。コロンビア大学美術史学科で、日本の具体美術協会ともの派についての特別講義をする。アメリカの抽象表現主義やミニマリズムとの関係についても言及した。若手の研究者が多く、質疑応答が活発であった。またニューヨーク州立大学美術史学科の作品講評会に呼ばれ、学生たちの作品にコメントして回るという貴重な経験をした。

この間、日常的に頻繁に研究者たちに会い、また専門古書店などを回って関係書籍の購入に努め、ニューヨークや近郊の美術館巡り、キュレーターたちとの面談、アーティストたちのアトリエ訪問も集中的に行った。

また今回の研究目的とは直接の関係はないが、詩の朗読会に呼ばれ、何度か朗読の機会を持った。美術の世界と現代詩の世界との関係は日本よりも密接で、視覚詩などの両者の境界領域での活動も盛んである。

3月14日、15日 ボストン、ケンブリッジ

ボストン美術館、ハーバード大学付属美術館（フォッグ美術館など）、IMTのアート・センターなどを見学。

3月16日 3月31日 ニューヨーク

ニューヨーク滞在の最終段階を迎え、帰国後の情報交換や研究の継続の仕方について、コロンビア大学のスタッフなどと打ち合わせを行った。とりあえず大学のヴィジティング・スカラーの身分は8月まで継続することとし、帰国後、5月に2週間ほどニューヨークに戻って、レクチャーなどを行うことにする。

4月1日 ニューヨーク発

4月2日 日本に帰国

以上が滞在日程に即した研修内容の概略であるが、付け加えれば、大学を拠点に調査を

行ったこともあって、教育研究のシステムについても具体的に知ることが出来たのは大きな収穫であった。 Semester制による集中的な講義の方法、ティーチング・アシスタントの活用、博士課程の学位授与のシステム、専門図書館の運営など、参考にすべき点が多々あるように思う。

本来の研究目的に関しては、まだ収集資料の整理が終わっておらず、一、二年の時間をかけて研究を継続し、比較美術史的な視点を踏まえた戦後日本美術史を単行本にまとめるつもりである。カルチュラル・スタディーズ的な方法に関しては、全面的な導入にはかなり疑問があり、美術館や画廊など文化制度の面での分析に限定されることになるだろう。

もっとも理想をいえば比較史的な研究とカルチュラル・スタディーズは一体化されるべきものであると思う。この問題についての考察は、今後、研究をまとめるに当たっての大きな課題として残されている。